



天二貸セ



有田町史によりますと、明治二十年、町民の有志十数人が中樽で英語夜学会を開いています（通史編・159ページ）。その発起人の中に大樽の陶磁器商・手塚亀之助の次男手塚英四郎の名前が見えますが、彼の自叙伝のコピーが資料館に保存してあります。

前回、この欄で日本最初の本格的な焼き物工場であった「精磁会社」のことを紹介しました。その中心的存在であった手塚亀之助の先進性は息子たちに引き継がれたようです。英四郎は自叙伝の中で、兄の国一と共に、まだ草分けの時代であった対米貿易に早くからかわり、大きな役割を果たしたことを伝えています。

国一は明治十九年、まずアメリカ・ペンシルバニア州ピッツバーグ市の陶磁器商店に住みこんでいます。経営者のフレンチ氏はボストンの大陶器商で、明治九年にフィラデルフィア万国博覧会に出品のために渡米した亀之助らと親しくなり、十三年には二か月ほど有田に滞在し、精磁会社でディナーセットの製造を指導

しています。これがわが国最初のディナーセットにつながり、第一号品は宮内省の浜離宮に納められています。

国一はほどなくアメリカ女性と結婚し、シカゴに日本雑貨の店をもちます。有田の男性として最初の国際結婚でしたでしょう。さらに国一は、後に日本陶器を設立する森村市左衛門の森村組がニューヨークに開いた雑貨店の支配人になり、英四郎をも同社に引っ張ります。英四郎は名古屋支店を振出しに神戸支店長、森村商事会社営業部長などを歴任します。大正の半ば、わが国にイギリスやドイツから魔法瓶が輸入されますが、国一・英四郎兄弟は、アメリカの会社と森村組との提携になる魔法瓶会社の設立を提案しています。

半生を回顧して英四郎は、森村市左衛門の信条であった「天に貸せ、必ず貸方に立ち、借方に立つな」を守り抜いた歳月であったといっています。単に貸方に立てというだけではなく、「天に貸せ」というあたりに実業家森村の思想の高さを感じます。



手塚英四郎さんの自叙伝は毛筆による手書きです。原稿は昭和12年3月に仕上がり、印刷して知己に贈るつもりでいたが、戦時になって紙が手に入らなくなったので出版を見合せ、16年9月に手書きでまとめたと付記してあります。

※その他の参考資料 — 「精磁会社伝記」など。

皿 山 冬 No.36

丹丘先生絵日記

大正10年から12年にかけての折々の出来事をB5くらいの大きさの和紙に奔放に走り書きしたものです。時期としては、第一次世界大戦後の景気が去り、不況が日本を包みかけていたころ。左翼が台頭して足尾銅山や神戸三菱造船所などで大争議が起こります。一方、野口雨情作詞、中山晋平作曲の哀愁を帯びた流行歌「船頭小唄」（枯れすすき）が盛んに歌われました。



〔大正十年〕

①一月十三日 本日は謡曲会のうなり始め（欄外に天狗とある。丹丘さんは琵琶や俳句もたしなんでいる）②二月十日木曜 競技会の陳列をなし暮れてより帰へる

腹巻 丹丘（はらまき・たんきゅう）
明治10年～昭和26年。神埼郡千歳村、いまの千代田町の出身。本名は勝太郎。
明治36年、東京美術学校日本画科卒。
佐賀高等女学校、龍谷中学校、成美女学校などをへて大正6年から13年まで有田工業学校に勤務した。教え子に日本芸術院会員古賀忠雄さんらがいる。元千代田町長、腹巻萬平さんは丹丘先生の次男で、前の有田町長青木類次さんと親交があったことから「絵日記」の存在が分かった。

③十月十八日 火 萬作泉水にはまる（次男萬平のことを丹丘先生は萬作と呼んでいた。萬平さんは大正八年生まれ）小一（長男）をつれて湯へ行く 帰りにノンキー二十銭④十月二十四日 月 運動会の優勝の花ひんを書く





⑤十一月十九日 土 早朝より波佐見へ行く 帰りは小春日の景色見んと又も野の川越して帰へる
⑥十二月三日 足のテキモノで京都市行きも見合せて居たが どれがたて行く事にした 学校よりの旅費八十円であつた
⑦大正十一年一月十七日 火 校長の内て打ちそろふ
⑧六月十九日 久々の天気 朝より午後四時まで香蘭舎へ行きて菓子鉢を置く
⑨おとめさんが見へた 小一をつれて立の川内へ網引へ行く 田の中より鮒を取りてテボの中大(い)にニキオウ
⑩大正十二年 七月八日 白川小学校にて職員の仕事検査 あなたの肺せんかたるハ早ておくれてす (野の川は野々川、香蘭舎は香蘭社)



◆さくら讃◆

11月7日、秋晴れの空の下、有田地区歴史と文化の森公園・さくらの森で、有田さくら会（蒲地昭三会長・会員118名）による記念碑『さくら讃』の除幕式がありました。

有田さくら会は昭和52年、故蒲原権さんが中心になって発足、これまでに町内に約5千本を植えてきました。やがては一目千本の景色を楽しんでもらおうという考えからです。

さくらは有田焼の文様に古くから用いられ、いわば有田皿山の歴史と一緒に生きた花です。そのような、さくらが郷土の文化や産業に果たした貢献に思いを馳せ、同時に会の発起者の郷土愛を伝えようというのが『さくら讃』建立の主旨です。碑のまわりは広々としていて借景も見事です。木々が成長した時の満開の風景を想像するだけでも胸がはずみます。一度足を運ばれることをお勧めします。（尾崎）

◆お知らせ◆

当館では女性を筆者とする有田皿山を題材とした「有田さんぽ史（仮称）」を編纂することになりました。現在町内外21名の女性たちによって活発な資料の収集や調査が行われ、知られざる皿山の一面が掘り起こされています。これまであまり表面に出ることがなかった皿山の女性の底力をこの機会に紹介できるものと思います。発刊は来年3月の予定です。どうぞご期待ください。



活発な意見交換がなされた第2回執筆会議の様子

●●● 寄贈資料紹介 ●●●

- ◆味噌醤油造り用具 一式 有田町 岩永正己様
- ◆瓶（磁器） 一点 有田町 中島正利様
- ◆扁額（谷口藍田書）一点 埼玉 松本庄一郎様

この他来客用として香蘭社より茶器セット、梶原茂弘様よりコーヒー碗5組をいただきました。

ありがとうございました。



水をくむ人

文明批評の書ともいわれる「莊子」に次のような寓話があるのを最近知りました。

孔子の高弟である子貢が旅の途中に漢江のほとりを歩いていると、両手に桶をかかえて畑に水をくみ上げている老人に出会いました。見ていると大変な労力のわりにはひどく能率が悪そうです。そこで子貢は、もっと賢いやり方があるじゃないかといって、テコの理屈を教えました。

すると老人は怒りさえ浮かべていいました。

「私は師匠からこのように教えられました。機械を使う人間は自分の仕事を機械のようにするようになる。そしてそんな人間は心まで機械のようになる。機械のような心をもつ人間は生まれつきの素朴さを失う。素朴さをなくした人間は魂のもつれから気持ちがあやふやになり、正直一途な気持ちとそりが合わなくなる。私もテコのような便利なものがあることは承知しています。ただ使うことを恥ずかしく思うのです」

（外篇の天地第十二）

もっと速く、もっと多く、もっと大きく。二〇世紀は「走る世紀」でした。もうそろそろ走るのをやめて歩いてみてはどうだろう。たまには歩く足をとめて立ち止まってみる。そのときに私たちが足元に何を見るか。「莊子」を読みながら考えたことです。（森田）

季刊『皿山』

通巻36号（平成9年12月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185